



羅針盤

松永 佳世子

Kayoko Matsunaga

藤田保健衛生大学医学部皮膚科 教授
Visual Dermatology 編集委員



接触皮膚炎の診療は謎解きと落とし穴の連続 —パッチテストは強い味方

本特集号では、ジャパニーズスタンダードシリーズ 2015 (パッチテストパネル® (S)を含む)で生じた陽性反応から、どのように接触皮膚炎の原因を読み解き、落とし穴に注意して患者さんに生活指導するか、そのポイントを症例呈示しながら解説しています。

1994年に日本接触皮膚炎学会が、ジャパニーズスタンダードアレルゲンを初めて設定しました。早川律子先生は長く事務局を務めており、学会がアレルゲンを作製し会員に配布していました。しかし2004年から旧薬事に抵触するとの理由で、アレルゲンの配布を中止しました。そこで、ジャパニーズスタンダードシリーズの規格に合う試薬を作製してもらえぬ企業を海外に求めました。結果、ジャパニーズスタンダードアレルゲン 2008はドイツのBrial社で製造され、医師が個人輸入で入手し、患者さんの診療にあたりました。同時に、その結果をアンケート調査し、陽性率を検討してきました。念願叶って、2015年5月にパッチテストパネル® (S)が佐藤製薬から発売されました。それは、1999年の申請から16年もの長きにわたる苦勞の末に達成された、画期的な成果でした。

湿疹・皮膚炎で治りにくい症例や、接触皮膚炎が疑われる症例にジャパニーズスタンダードシリーズをセットでパッチテストすることは、原因アレルゲンの見落としを少なくし、正しい診断に導くことを可能にしました。同時にジャパニーズスタンダードシリーズは、感作の状態の年次推移を調べることによって、感作物質のモニタ

リングを行う有益な検査といえます。須貝哲郎先生、早川律子先生、上田宏先生方の後を継いで、パッチテストの奥義を極めようと努力してきた39年のパッチテスト研究歴でしたが、まだまだ極めることはできておりません。

教授職最後の5年間はいずれも学会の特別委員会の委員長として、旧茶のしづく石鹸によるコムギアレルギー、そしてロドデノール誘発性脱色素斑の実態調査と、病態解明等に明け暮れました。このような活動が評価されて、2016年4月からは藤田保健衛生大学医学部アレルギー疾患対策医療学(ホーユー [株] 寄附講座)の教授として残り、パッチテスト試薬の濃度基剤の検討、成分パッチテストの至適濃度と基剤の検討、SSCI-Net(化粧品等皮膚安全性症例情報ネット)による産学官連携の研究、経皮感作食物アレルギーの抗原解析等、私にできる仕事を続けていくことになりました。

昨日、日本列島はこれまでにない大雪に見舞われました。皆様は大丈夫でしたか? 1月24日は65歳の誕生日でしたが、第6回日本皮膚科心身医学会を名古屋で開催させていただきました。寒い中、多くの参加者があり、患者さんの心に寄り添った診療について、学び、討論いたしました。

藤田学園は創始者故藤田啓介先生の「我ら、弱き人々への無限の同情心もて、片時も自己に驕ることなく医を行わん」を医療の理念としています。年を経るごとに、このお言葉は私のこころの中に沁みできております。

2016年1月吉日